



Title	中国思想研究分野における若手研究者国際化への戦略と方法：「出土資料と先秦思想」青年学者国際シンポジウムを企画運営して
Author(s)	佐藤, 将之
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 135-150
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60856">https://doi.org/10.18910/60856</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中国思想研究分野における若手研究者国際化への戦略と方法

——「出土資料と先秦思想」青年学者国際シンポジウムを企画運営して——

佐藤将之

### 一、世界に「存在しない」(?) 日本の中国思想史研究

他から参考にされない研究に存在価値はあるのか?このような問いかけに対してはいろいろな角度から意見が寄せられるであろうが、ひとつだけ確かなことがある。それは、そのような業績は、その研究を行った本人には意義があるものかもしれないが、参考にされることがなければ、それは他の人にとってみれば存在しないのも当然である。他でもない、これは日本の中国古典思想研究と世界のシノロジ、あるいは日本以外の中国哲学研究の状況との関係を言ったまでである。そもそも、人文学分野における各研究分野同士の激しい生き残り競争のさなかにあつて、現代社会の諸問題との直接の対話をどち

らかとえば避けて来た日本の中国古典思想研究は、その生き残りのためには、世界がその水準を認め、その成果を必要としていることを不断に証明していかなければならなかったはずである。しかし、残念ながらこの分野をめぐる状況は全く逆の方向に進んできた。日本における人文研究分野の中でも、中国古典思想の研究は世界からの孤立がかなり絶望的なレベルまで進んでしまっている。筆者は、このような日本の中国思想研究をこれ以上孤立させないことが、日本の中国古典思想研究分野の衰亡を食い止めるひとつの方策であるとの信念に基づき、各種の活動を繰り広げている。その一環として実施されたのが、大阪大学の湯浅邦弘教授と共同企画し、二〇〇四年三月二十六日と二十七日に大阪大学で開催された「戦国楚簡と中国思想史研究」国際シンポジウムであった。

このシンポジウムの開催後、筆者は「中国思想史研究における国際交流への覚書——『戦国楚簡と中国思想史研究』特集号によせて——」(注1)(以下「覚書」と略称)を寄稿し、上記のシンポジウムをオーガナイズした背景になっている日本の中国思想研究が世界の研究舞台から孤立していく状況と、その理由、およびその状況を改善する戦略的展望を提示した。

発言してみても分かったことだが、日本の中国思想研究が世界から孤立化している状況を痛切に感じているのは何も筆者だけではなかった。前述の国際シンポジウムにおけるパネルディスカッションで、パネラーを務められた日本女子大学の谷中信一教授も、そのとき台湾、香港、アメリカの学者と院生の計十名にも上る発表の中に、日本の研究への言及がただのひとつもみられなかったことに注意を喚起されたのである(注2)。さらにその後、谷中教授は、大東文化大学の池田知久教授とアメリカのマウントホリヨークカレッジで開かれた「第三回中国出土資料国際会議」に参加し、その会議を回顧したレポートを『東方学』に寄稿されたが、やはり同じように、日本以外の会議参加者が誰一人として日本の研究を引用していないことに改めて危機感を表明している(注3)。

さらにその同じ文章のなかで、共同執筆者である池田

教授は、その七年前にダートマス大学で開かれたシンポジウムの折に、「この機会に今後この種の国際会議に日本からの参加を増やすよう」に訴えたことと書いている(注4)。もしそれが七年前に言われていたことだとすると、その間、池田教授が置かれてきた状況のなかでは、日本の研究の世界からの孤立化は、池田教授本人の努力とは逆に確実に進行していたことになる。池田教授のケースが示唆するように、「日本の研究は優れている」↓「日本の研究が優れていることを世界の学者も知っている」↓「ゆえに日本の研究者は世界から招かれる」という暗黙の三段論法をタテに、日本からの参加者を増やすように国外の研究者に訴えても、国外には国外で日本の研究者を招待しなくなっている必然的な状況があるのであり、その状況を解決すべく努力することなくしてただ「日本からの参加者を増やしてくれ」と訴えても、実際の状況の解決にはつながらない。もし、日本の研究者が国外の会議に招かれなくなっている趨勢がそのまま続くと、ましてや外国語で論文を発表する術を知らない若手研究者は近い将来、日本における中国古典思想研究分野の衰亡を当事者として迎えるという不本意且つ不名誉な役割を負わされるかもしれない。

私はこのような状況を目の前にして、若い研究者が海

外からのこのような趨勢に受動的に反応するのではなく、この状況をしっかりと自覚した上で自分から国際舞台に出撃する趨勢を創り出さなければ、日本の中国思想研究の孤立化を防ぐ術はないと考えている。筆者が大阪大学でのシンポジウムに引き続き、今度は若手主体による国際学術シンポジウム「出土資料と先秦思想研究——青年学者国際研討会——」（於台湾大学哲学系、二〇〇五年三月二十七日〜二十八日）を企画・実施した所以である。

本稿では、「覚書」で述べた内容を踏まえつつ、今回、若手研究者国際学術シンポジウムを企画したコンセプトならびに経緯についてそれを提言風に示したい。また本稿は同時に「覚書」執筆以来、筆者が引き続き携わってきた日本の中国思想研究の国際化努力への過去一年間の活動報告書でもある。ただ、私はここで、「日本の中国思想の国際化のために若者同士の交流が必要だ」などと陳腐な主張を繰り返すつもりはない。本稿の目的は、あくまでも国際的な活動の経験の無い若手研究者が、中国思想研究の国際舞台に進出するにあたっての必要で且つ実行可能な具体的ステップを示すことにある。

## 二、日本の中国思想研究国際化への

### 三つの方向からの取り組み

筆者は「覚書」の中で、中国思想史における日本人の研究がだんだん世界の中国学から孤立している状況について警鐘を鳴らしたが、そのポイントをもう一度ここで整理すると、(1)世界の中国関係の図書館や中国思想研究者が日本の書籍やジャーナルを購入しなくなってきたこと、(2)日本以外の学者が日本人、特に日本語で書かれた論考を引用することをほとんどしなくなってきたこと、(3)国外における国際会議の主催者が日本の学者を招待したいという意向が低下していること、これら三つの状況の中に複合的に現れていると考えられる<sup>(注5)</sup>。その状況を改善させる対策としては、(1)に対して、(A)外国において日本の書籍、ジャーナル等が整備されるよう何らかの措置を講ずる、(2)に対して、(B)日本研究者の業績が外国語で発表、もしくは出版される、そして(3)に対しては、(C)定期的に行われるシンポジウムにおいて、日本の研究者の参加比率を高める努力はもちろんのこと、日本の研究成果そのものに注目した国際学術シンポジウムを企画、実現させていくこと、となる。そしてその(A)から(C)に推進しなければならない。

まず(1)の状況に関して言えば、筆者は、台湾大学や東呉大学で、大量の日本の中国思想研究の日文書籍を包括

的に購入し、またこの分野の主要なジャーナルの欠如を補うべく努力した他、日本漢学の成果を中国語で紹介するプロジェクトを推進し、そのほか、筆者自身の研究テーマにおいて、台湾のジャーナルで特集号を組んで日本の研究成果の包括的介绍と入手経路の整備につとめている。

この点と関連して、日本の研究者個人にぜひ実践してほしいことは、世界の中国思想研究者がライブラリーワークを行う確率の高いアメリカのハーバード大学燕京図書館、オランダのライデン大学の漢学研究図書館、それに台湾の中央研究院文哲所の研究図書館、台湾の国家図書館附属漢学研究センターの四カ所（出来ればそれに台湾大学附属図書館も加えてほしいが）へ自著を寄贈することである。特にこれから博士論文を完成させる若手諸君は、その博士論文の製本したものを台湾の国家図書館附属漢学研究センターに寄贈するとよい。ここが世界の漢学研究に関する博士論文の収集を続けており、関連テーマの博士論文がここで検索、閲覧される可能性が高いからだ。

それから、(2)の問題に関してであるが、引用してもらうのは、手段というよりは目的であるから、そうしてもらうためには、質の高い研究成果を出すべく努力すると

いうのはもちろんであるが、ここで考えたいことは、日本には優れた研究が沢山あるはずなのに語学的な壁によって引用されなくなっている現状をどう克服すべきかという問題である。そのために筆者が行っている努力は四つある。(B1)すでに日本で出版された研究書や論文の訳書を出版する、(B2)日本の主要研究成果を中国語の要約にして、データベースとして活用してもらう、(B3)これから発表する論考の中国語での発表、出版をサポートする、および(B4)以上の作業を成果として公表できる学術シンポジウムや、ジャーナル等の特集号の企画や運営を行う。そして(B4)は、(3)の「定期的に行われるシンポジウムにおいて、日本の研究者の参加比率を高める努力はもちろん、日本の研究成果そのものに注目した国際学術シンポジウムを企画、実現させていくこと」の努力と軌を一にする(注6)。

本稿が取り上げる二〇〇五年三月二十七日〜二十八日に台湾大学哲学系で開かれた「出土資料と先秦思想研究」青年学者国際学術シンポジウムも、まさにこの主旨にしたがって企画されたのであるが、以下詳述するように、このシンポジウムには「青年学者」（若手研究者）のタイトルを冠しているように、若手研究者による国際シンポジウムとしてその意義を際立たせているいくつかの特色

がある。以下それらの点について述べてみたい。

### 三、「出土資料と先秦思想研究」青年学者 国際学術シンポジウム開催の経緯

それではまず、「出土資料と先秦思想研究」青年学者国際学術シンポジウムの開催された経緯について説明したい。本シンポジウムが、筆者の日本の中国思想研究の成果を広く国際的に紹介しようという目的のもとに企画されたものであることは言を待たないが、より具体的には、このシンポジウムの開催には二つの背景があった。

第一は、この交流活動の両母体である台湾の「簡帛資料文哲研誼会」(注1)(代表：林啓屏教授)と日本の「戦国楚簡研究会」(代表：浅野裕一教授)間で若手研究者による交流を期待する声が上がってきたことであった。特に台湾側は、二〇〇四年三月二十六日、二十七日の大阪大学でのシンポジウムの際、三名の院生発表者をはじめとして総勢では八名の院生・見学の若手学者を同行させたことから、このシンポジウムにおける院生発表セッションの準備等の作業をつうじて日本と台湾の若手研究者の交流はその会のなかで実質的に始まっていた。また、この合同シンポジウムの基調講演をされた台湾大学哲学系の陳鼓应教授は、会議中から数次にわたり今回の活動

の継続を呼びかけていた。そこで筆者は、当時台湾大学哲学系博士課程の林明照君と東北大学国際文化研究科博士課程の福田一也両君に、院生レベルによる国際交流シンポジウムの企画の意思を確認、福田君の指導教官である浅野裕一教授の支持も得て、シンポジウム最後のパネルディスカッションの席上で、この若手シンポジウムを台湾で開催する予定である旨を正式に発言し、その場に出席していた東北大学と大阪大学の院生を主な発表者として招待した。

第二の背景であるが、実は、陳鼓应教授と筆者が、台湾でこのような若手国際シンポジウムの開催を推進させた理由は台湾側の状況にもあった。筆者は、二〇〇二年、台湾大学哲学系に着任後、台湾大学哲学系で毎年開かれる院生主催の「成果発表会」を二年にわたり観察、また会議運営などの指導も行ったが、台湾大学哲学系の「発表会」には、外部の聴衆はおろか系内の教員も来ない。さらにそのことが院生の気分を緩める結果になるのか、発表会そのものは、各セッションで司会やコメントーター等も、台湾での通常の学術シンポジウムの形式そのままに立てられるもののおおまかな参加者は自分のセッションが終わるとすぐその場を去るといふ台湾の学術活動の悪習はそっくりそのまま真似するため、大会

議室を使いながら、発表者やベル鳴らしなどの作業者以外の聴衆はほんの数名という「中身」がない「発表」会としてマンネリ化していた。さらに、司会やコメンテーターもほとんど発表者の顔見知りの範囲内から選ばれるので、他人が読んで批評するという程度の意義はあるにせよ、もともと同じような訓練を受けたもの同士の批評でもあり、また聴衆も皆同じ学科内の学生ということもあって、「ままだ」と的感覚が抜けない憾みがあった。しかしながら、通常の学術シンポジウムでは院生に発表の場が与えられるという機会がほとんどない台湾のシンポジウムでは、特に中国哲学関連の院生が自分の実力を発揮出来るような機会は、あまりなく、その結果、若手研究者が博士号をとって「もう一人前の学者になった」と言われても何をしてよいか分からず右往左往するという状況になっている。そのような状況下、特にこの大阪での合同シンポジウムの前に行われた院生発表会の閉会式を司会した陳鼓応教授は台湾の中国哲学研究もこのままでは衰退してしまうのではないかという危機感を吐露されていた。こうした状況を脱出するためには、院生自身が主体的に活動でき、且つ学問的にも意味のある活動をアレンジしなければならぬ。そのような意味においても、この分野における若手主体の国際シンポジウムの実

現は待望されていた。

以上のような背景の中で、筆者の若手シンポジウム開催の提案はなされた。大阪大学でのシンポジウム終了後、筆者は、二〇〇四年三月の合同シンポジウムのホストであった湯浅教授に対し、阪大から複数の院生発表者を台湾に送ることを要請し、快諾していただいた。そして帰台後、早速林明照君に学生によるシンポジウム運営委員会を発足させることを指示し、若手シンポジウムの準備が始まったのであった。ただし、準備グループのリーダーになってもらった林君は、いくら台湾側院生の中では年長とは言え、大阪大学のシンポジウムにはただ発表者として同行しただけで、国際シンポジウムはおろか国内のシンポジウムの企画、運営の経験もない。しかも当時は博士論文執筆の重圧もあったため、シンポジウム設計そのものの作業は、筆者自身が引き続き行った。

#### 四、「出土資料と先秦思想研究」青年

##### 国際学術シンポジウム開催の特色

それでは、以下、本シンポジウムの特色を述べるが、本シンポジウムの発表者と発表内容等について、また日本からの参加者がこのシンポジウムをどのようにとらえたかは、本号所収の井上了氏の参加報告書と、筆者が会

議直後に主催した座談会における発言の中に、その内容が盛り込まれていると思うので、筆者がこのシンポジウムをどのような観点からどのように設計したかという点を絞って述べてみたい。ポイントは三点である。

(1) 出来る限り多数の日本人学者による

集中的交流の展開

まず、第一点は、筆者が学術国際交流において提唱している「出来る限り多数の学者による集中的交流の展開」のコンセプトに応じ、日本側にとつては、個人のレベルを超えた意味のある交流にするために、日本人発表者の割合を出来るだけ高めた。つまり、本シンポジウム総勢十七名の報告者に対して、日本人報告者が六名（筆者も数に加えれば七名）を占めたのである。もちろん、今回は、当初より大阪大学と東北大学からの参加者を最も重要なパートナーとしていたため、日本からの参加者の比率が多少高くなることは問題とはならなかったが、一般には、国際会議をオーガナイズすればすぐ分かるように、ある特定の国からの招待者の比率を増やすと、招待地域に対する平等の原則に反するという反発が出てくるため、予算がその人数の比率に応じて十分に支給されないという結果になる。今回のケースでは、参加者が全員院生と

若手であるため、海外招待者予算のようなものは、ほとんど出ない。だから筆者は、日本からの参加者に対して（今回一緒に参加したドイツとアメリカからの参加者も皆同じであるが）、往復交通費の出費は覚悟しておくよう、準備段階からお願ひしていた。だが、賢明な読者諸氏なら、この状況には、別の解釈が可能であることに気づかれるであろう。つまり、経費の面だけ若干多くの出費を覚悟すれば、日本人研究者参加者の比率が高いシンポジウムを海外で開くことは、難しいことではないという点である。「覚書」でも指摘したように、日本の研究者がある規模を持ってそのシンポジウムに集結するという事実が、そのシンポジウムの開かれる場所、内外の研究者の参加意欲を刺激し、また会議主催者の予算獲得をも容易にするのである。一昨年、台湾大学で開かれたシンポジウム<sup>注3</sup>は、まさにこうした見通しに沿って構想され、筆者の予想どおり必要な経費も調達され、参加者の人数にせよ、その後、台湾学会への各種インパクトにせよ、予想以上の成功を収めたと言える<sup>注4</sup>。

今回のシンポジウムについては、院生を中心としたシンポジウムであるので、参加者の人数等は、そんなに期待出来ないにしても、予算面では、結果として中国哲学会、政府教育部、それに台湾大学文学院より日本円にし



て合計三十万円ほどの予算を獲得した。このような額たるや、台湾で院生のための「発表会」とランク付けられるシンポジウムに補助される額としては、異例に豊富な予算である。このような多額予算の獲得は、六名というある程度規模のある人数の日本の若手研究者が若干の自らの出費を覚悟して出撃することにより、それにより国内と欧米の若手学者の関心も引き付け、このシンポジウムを国際シンポジウムにすることによって、獲得できた「成果」といえるだろう。

## (2) 発表における徹底した国際化（中国語化）

第二点は言語での国際化である。本シンポジウムにおいては、日本からの参加者に対し、中国語による論文の執筆を最低条件として要求し、また発表もなるべく中国語で行うよう催促した。

日本の中国古典思想研究の現場では、「文献が正確に読めようになる」ことを重視する代償として、中国語の習得は長らくおざなりにされてきた。その結果、中国思想研究者の外国語によるコミュニケーション力不足は、世界の中国学研究者が中国語をまじり学び、また中国、台湾の研究者は、英語の習得を重視する趨勢の中で、その両者のどちらともコミュニケーションが取れず、日本の研

究者を世界の漢学研究から孤立させる大きな要因となっている。そして、国際会議に出席すればすぐ分かることだが、この日本での状況と対照的に、現在少なくとも国際舞台で活躍する欧米の中国学者の語学力の向上は、一次資料の読解能力も含め著しい。昨年三月の大阪のシンポジウムで、アメリカのスコット・クック教授が、日本語の挨拶を終えた後、中国語で「ああ、やっと母国語でしゃべれます。」と言って会場を沸かせて、自身で書き下ろした中国語の論文を中国語で発表したのは、参加者の記憶に新しいと思う。さらに年齢が三十代に下ると基本的に発表を中心とした学術活動において必要な中国語運用能力を持っている若手学者はもう数え切れないくらいである。この点は強調しなければならない。いくら台湾で国際会議がたくさん開かれるとはいっても、招待される外国の研究者の数は限られている。特に業績の内容がよく分からない若手学者への枠は、あまりない。そうなると数名の招待枠は、会議における中国語の運用能力があると認定された欧米の若手にとられてしまうのである。

果たして、今回のシンポジウムについても、アメリカ・イエール大学から参加のジョン・デルリー (John Delury : 魯樂漢) 氏やドイツ・ベルリン大学で博士号を去年取得し、しかも台湾大学哲学系の博士課程にも在籍中であ

るウォルフガング・シュワベ (Wolfgang Schwabe : 施維  
礼) 氏の両氏は言うまでもなく中国語は極めて堪能であ  
る。つまり、日本から参加者には、こういう欧米若手学  
者の存在を他人事ではなく、将来国際舞台でこういう人  
たちと競争していくのだ (つまり彼らが招待される分だ  
け自分たちが招待される確率が下がるのだ) という厳し  
い現実と関連させながらよく見据えてほしいのだ。

この点に関連して、日本からの招待者の通訳関係の予  
算獲得について付言しておこう。確かに筆者の研究室で  
は、過去一昨年から一年半あまりの期間に浅野裕一教授  
をはじめ、台湾で発表された日本人研究者の論文を合計  
十篇翻訳し、また同時通訳のサービスも提供した。そし  
て、その大部分の論文翻訳や当日の同時通訳予算は原則  
として会議主催者側から獲得した。しかしそれらの作業  
に対して、中央研究院での講演以外には、台湾側が翻訳  
のための予算を自発的に出してくれたものはない。そう  
すべきだと思った筆者が、論文の翻訳作業や通訳のアレ  
ンジなど、必要な作業すべての過程と結果に全責任を持  
ってその任に当たると約束したため、その前提下に「予  
算付き委任状」をもらっていたに過ぎない(注9)。もし、  
論文も発表も日本語でとなれば、台湾の会議主催者は通  
訳のための予算や人探し、それに作業の監督といった新

たな作業が当然増える。またその連絡も日本語でという  
ことになれば、台湾の常識的なオーガナイザーでそれを  
自分でやってもよいという人はまづいない状況も納得で  
きる(注10)。実際、この青年学者シンポジウムの主催に当  
たった簡帛資料文哲研読会は、今年の十二月にやはり出  
土文献関係で大型シンポジウムを開く準備を進めている  
が、その準備委員会の席上、筆者は多数の日本人発表者  
枠を要求し、且つ通訳の予算もつけてほしいと主張した  
が、欧米等の研究者はちゃんと中国語で発表しているの  
に、どうして日本からの参加者だけ例外的に通訳等の費  
用を出さなければならぬのかという意見もあり、発表  
枠をもらうという範囲で満足しなければならなかった。  
いづれにせよ、中国語の実力がクック氏なみの学者がど  
んどん増えている欧米の状況を見れば、中国や台湾での  
国際会議に欧米の学者の比率が増え、日本学者の比率が  
今後下がる趨勢はもはや阻止出来まい。総じて今後、日  
本の中堅以下の学者が日本以外の国際会議に出席しよう  
と思えば、論文を中国語で提出することは義務となると  
明言しておこう。

以上の状況を踏まえ、今回のシンポジウムは言うまで  
もなく全て中国語で行われた。そして私が日本からの参  
加者に要求したことは、(中国語そのものの運用能力は個

人個人でそれぞれ差があるにしても）、少なくとも総合的に見て彼らにそんなに遜色のないレベルでの参与であった。具体的に言えば、上述したように論文は中国語で提出してもらおうということが第一のハードルである。この会議は中国語が今は書けないという人を排除するために企画されたわけでは絶対ないが、中国学をやっている研究者が、中国語が全く書けないというのは、やはりナンセンスであるのだから、書けるという前提で参加してもらわなければならない。そしてそれを日本以外で発表出来るものまで高めるためにどういうノウハウが必要なのかということはこの機会によってしつかりと学んでほしいのである。ただ、参加者には発表の内容をより充実させる、より流暢な中国語の発表をってもらうために、以下のような工夫を行った。

第一に、日本側のそれぞれ六名の発表者に対して、それぞれの発表者に台湾側の院生一名ずつ、合計六名をコメントーターとして割り当てた。そして、そのコメントーターが、原則として担当する論文の中国語の添削を請け負った。台湾側の院生諸君には添削作業を兼ねながら、当然その論文に対する批評もしてもらう。筆者は、台湾側のコメントーターから、彼らのコメント原稿を見せてもらったが、筆者が見たすべてのコメントーターの持参

した報告論文の空欄、あるいは別に用意したノートには批評コメントがびっしり書かれていた。初めて海外で発表した日本の参加者諸君に与えられた厳しいが真摯な批評は、これから研究者として活動していく上で一生の財産となる。また、添削のプロセスでは、筆者も各執筆者とメール連絡において、中国語で発表するために「こうしたらよい」というようなアドバイスを口頭やメールの中で逐次行なった。こうしたことも将来、マニュアルとして整理すれば、将来中国語で論文を執筆する若手研究者のために参考に資するところもあるのではないかと推察される。ぜひ、そうなるように筆者自身も努力したい。

第二に、日本からの参加者六人の中国語はお互いに相当個人差があったので、中国語での発表の困難な諸君のセッションには当時筆者の研究室の助手をしていた盧彦男君（現在京都大学文学部に研究生として留学中）に通訳してもらったり、筆者が司会を担当して、意思疎通の問題があった場合の事態に備えた。今回、発表と質疑応答における日本側発表者の悪戦苦闘ぶりは、本号所収の「座談会」のなかに発表者自身の口から生き生きと語られている。

第三に、ある程度中国語の会話が出来た日本側の参加者には、台湾の院生発表者のコメントーターも同時にし

てもらい、中国学分野における日本以外の学術交流の方法や慣例について、経験を通じて一歩踏み込んだ体験してもらった。同時に、このようなアレンジは台湾側の院生にとつても意義のあることで、上記の如く、台湾での院生「発表会」では、「ままごと」的感覚が抜けない憾みがあるため、日本の若手研究者の報告内容を真摯に批評すること、また真摯な批評を受けることによって、そうした雰囲気被打破され、会議全体にいい意味での緊張感がもたらされた。

総じて、発表等のプロセスをつうじて、中国語の運用が困難であった諸君も、また中国語で発表、交流をなんとかこなした諸君も、現時点で出来ることはしっかりとやったという自信はつかんだと思う。しかしそれと同時に、欧米から参加の両名が連絡を含む全てのプロセスにおいて自分から責任を負いつつ発表の準備をしたという状況と比較すれば、日本の若手も現在の状態のままだと、将来中国学研究の舞台における厳しい国際競争の中では、生き残っていくことが出来ないという危機感も持ったはずだ。

### (3) 発表内容の中国語による出版

最後に第三点の「報告内容を中国語で出版までもって

いく」という点について触れておく。筆者は、日本からの発表者全員に対し、発表原稿提出の際、原稿はすべて台湾の学術誌の書式に応じたものを提出するよう要求した。これは、中国語で論文執筆の訓練をするという直接の目標がある点もさることながら、これには、このシンポジウムで発表した論考をそのまま台湾（もちろん中国でもかまわないが）の学術誌に投稿可能なものとするという究極目標も設定されていたからであった。現在台湾では、ほとんどの有力大学の人文思想系がジャーナルを発行しており、それらは、国家図書館の『漢学研究』など全国性のものもあるが、そうでなくとも、かなりの大学の学術誌が、日本で言う大学内の「紀要」であることに留まらず、投稿一本あたり二名の査読員をアレンジするなど外部に広く投稿を呼びかけている。加えて「国際化」は台湾のどの学術誌においてもある種合言葉のようになっており、投稿に関する諸ルールを遵守しさえしてくれば、国外からの投稿も大いに歓迎している。

本シンポジウム終了後、未発表原稿で報告を行った五名が七月末までに投稿用の完成原稿を筆者に提出してくれたが、そのうち四篇の投稿が完了している。投稿すれば当然、覆面査読員からの厳しいコメントにしたがって書き直したりしなければならず、また、審査そのものに

パスできない事態もある。しかし、今回日本から参加の諸君は、初めて海外で発表した原稿を、日本以外の学術誌に投稿するところまで実現させたのであり、その事実自体に極めて高い意義がある。そして一度や二度パスしなくても、最終的に掲載されれば、その人はすでに立派に国際中国学の脈絡で活動し始めたことになる。これは、今回日本から参加された諸君とこの活動をオーガナイズした筆者の当面の共通目標と言つてもよいだろう。

##### 五、今後の若手中国思想研究者の

##### 国際的学術活動のために——結びにかえて

本稿は、今回の台湾での院生レベルを主体にした若手研究者国際シンポジウムが計画された背景を、主に日本の中国思想史研究の国際化の必要というコンテクストから説き起こし、またこの会議の構想と特色に関して、特に国際活動未経験の日本からの参加者の発表を如何にアレンジするかという点に焦点を当てて説明を加えた。この経験を今後に生かすため、筆者はここで二点あまり補足して結びの言葉としたい。

第一に、今回の活動は、純学問的観点から見れば、出土文献の分析を中心とした中国古代思想研究に関する若手研究者による国際シンポジウムという範囲以上の意義

には及ぶまい。しかし、日本人若手研究者による国際学術交流の推進という観点から見れば、普段ほとんど国際舞台において発表の機会が与えられない日本と台湾の院生レベルの若手研究者がこのシンポジウムを機会に密接に協力し、また特に日本側の参加者にとつては、中国語における発表のノウハウを発表の準備から投稿に到るまで終始一貫して自らの体験によつて学ぶことが出来た点などは、特筆してよいと思われる。そして、この活動を企画した筆者にとつての重要な点は、今回の参加者が中国語における論文の執筆と発表、台湾、欧米の院生との討論や交流など、今回の活動を通じて学んだことは、まさに日本の若い中国思想研究者すべてがこれから中国学の国際的学術活動を遂行していく上で身につけなければならないノウハウであるという点である。遺憾なことに今まで、中国などへの留学やこうした国際会議に参加した日本人研究者の数は百の単位をとうに超えているにもかかわらず、この分野の国際化が一向に進まないのは、具体的はどうしたら日本の中国思想研究を国際化できるのかという問題に対する実行可能な方策とノウハウが有効に提示されてなかったところにも原因の一環があるのではないか？このような問題意識から、筆者は、今回の参加者一人一人がそれらをマニュアル化し、利用可能な

公共の財産にすべく努力することを望んでいる。というよりも、今回の体験を新鮮なマニユアルとして残すために筆者は、今回のシンポジウム終了後ただちに座談会を行い、参加者一人一人の記憶が鮮明なうちにその貴重な体験を記録に残すことに成功した。

第二に、今回の参加者は、国際活動を遂行していく上でのノウハウをマニユアル化し、それを後輩たちに伝えて行くと同時に、今後は自らのイニシアチブによつて、このようなシンポジウムを継続的に行い、日本の若手研究者が、定期的に国際舞台のなかで自分の実力を試すことの出来るような機会をある種の「制度化」（それが無理でも定期イベント化）させられるよう努力してほしい。実はこうしたシンポジウムは、(1)日本の参加者も論文を中国語（かあるいは英語）で準備する、(2)なるべく多くの国外発表者を招く、(3)その成果を直接国外の学術誌に発表できるよう努力する、の三点を満たせば、シンポジウム自体は日本で行っても同じ効果を挙げることができるのである。よい知らせとしては、台湾側で本シンポジウムの運営に当たった林明照君が、二〇〇五年六月に台湾大学哲学系において博士学位を取得、その後、台湾の国家科学委員会人文科学研究センターのポストドク研究員となつた。また、本文の修正稿執筆の最中に、このシン

ポジウムに参加した大阪大学博士の佐野大介氏が、このシンポジウム参加が機縁となり、台湾中南部の彰化にある明道管理学院応用日本語系より助教として採用された。林君はこのシンポジウムの続編を企画中のことである。その活動が成功するよう筆者も全面的な協力を約束している。企画者として望外の喜びである。

総じて、このような若手研究者国際化のためのノウハウがマニユアル化され、また活動自体も定期的に行われるようになり、毎年新たな参加者を含む、若手日本人研究者の中国語での発表と投稿が四、五年続いただけでも、一度そのノウハウを得た人は、二度目以降の発表はずっと易くなるから、のべにして三十篇から四十篇くらいの論考が中国語で生み出されることになる。日本人による研究が、国際的な中国思想研究の流れの中で、再び息を吹き返すようになるのは恐らくこうした試みの中においてであろう。

どの学術分野でも国際化が当たり前のこの時代において、海外で活躍しなければならぬのは、他ならぬ若手研究者自身である。若手研究者がこれ以上、国際会議の出席報告文の読者のみの役割に甘んじてはならない。本稿で説明したような国際会議出席とジャーナル投稿へのノウハウを学んで自ら出撃し、自身の研究成果を国際シ

ノロジーの研究舞台に向けて発信してほしい。

二〇〇五年三月十五日 摺筆

二〇〇五年九月一三日 修正加筆

## 注

- (1) 佐藤将之「中国思想史研究における国際交流への覚書——『戦国楚簡と中国思想史研究』特集号によせて——」(『中国研究集刊』、第二六号、騰号、二〇〇四年)。
- (2) その発言の全文は「パネルディスカッション 出土資料と中国学研究」(『中国研究集刊』、第二六号、二〇〇四年)中における谷中教授の発言部分を参照。
- (3) 両人の見解は以下のとおり：「日本人研究者にも優れた論文が少なくないにもかかわらず、中国人にせよ欧米人にせよ、日本語で書かれた論文を引用したり参照したりする者が皆無だったことである。中国の研究をフィールドとするのであるからやむをえないことと言ってしまえばそれまでだが、これまで日本語論文が引用されていたことがしばしばあったことからすると、今後そのような傾向がますます強まるのではないかと危惧されるのである。」谷中信一、池田知久「第三回中国出土資料国際会議参加報告」(『東方学』、第一〇九号、二〇〇四年)一四二ページ。
- (4) 前掲文、一四〇ページ。
- (5) 具体的には「覚書」を参照されたい。さらにこうした状況と折り重なって起こっている状況として、日本と日本以外の中国思想史(実は、「哲学史」ではなく「思想史」と定義したくなる事がある種の日本の特色を示しているのだが)間の問題意識の間に交流がなくなっている点も、挙げられるが、この点は研究の内容そのものに関連する問題なので、本稿では触れず、しかるべき機会に議論したい。
- (6) この方面における筆者の具体的努力として、筆者自身の国際化取り組みへの主旨に全面的な賛同をいただいた日本大学の館野正美教授の協力を得るとともに、日本と台湾の若手研究者六名を迎え、日本の中国思想研究のそれぞれの分野の問題意識と研究概要を中国語で紹介、評論するという内容の「日本の漢学と中国思想哲学研究」というシンポジウムを二〇〇五年五月二十七日～二十八日に台湾大学哲学系で開催した。
- (7) 陳鼓應教授と郭梨華教授が代表をつとめ、「戦国楚簡と中国思想史研究」国際シンポジウムの共催団体でもある「簡帛道家資料ならびに新出土資料文献研説会」の後身。
- (8) 二〇〇三年十二月二十八日、筆者が日本の楚簡研究会の浅野裕一教授を含む四名の日本人学者を招いて行った「日本漢学の中国哲学研究と郭店・上海新出土資料」国際学術

シンポジウムを指す。

(9) 本シンポジウムの直前である三月二十五日～二十六日に  
舉行された「出土資料と中国思想国際学術研討会」も、さ  
かのぼれば、この会議の成功をふまえ、当初郭梨華教授と  
筆者によって企画された会議であった。しかし、筆者は、  
この青年学者シンポジウムの企画、運営に専念するために、  
三月二十五日～二十六日のシンポジウムの運営委員会のメ  
ンバーならびに報告者等の役から全て降ろさせてもらった  
のである。

(10) だがこの点においても別の見方が可能である。「覚書」で  
も述べたが、十分な予算をつけ、適切な人材を論文の翻訳  
や、会議の通訳に当てれば、学術交流において十分な意思  
疎通を図ることは困難なことではない。だから、台湾側の  
研究者の一員としての筆者は、国際シンポジウムを運営す  
る際には、翻訳や、通訳の予算を少し見積もっておけば、  
日本からそのシンポジウムのテーマに一番ふさわしい人材  
を招くことが出来ると、台湾での運営委員会の折には繰り  
返し主張しているのである。だが、このためにも翻訳等の  
人材を確保することが不可欠で、毎回、日本からの数名の  
ゲストのために、こうした人材を常時確保しているのは、  
筆者の研究室だけということになってしまふのである。過  
去こうした作業が全部筆者のところに回される結果になつ

たのはそういう背景もある。

(11) ただ、日本にとって不利なのは、欧米学者に対しては英  
語でもよいというケースがままあることである。台湾の学  
者は中国関係が専門でも欧米留学組も多く、ましてや国際  
シンポジウムの参加者においては英語が読めるのは当たり  
前だという認識があるためである。だがやはり大部分のケ  
ースで欧米の発表者は中国語で書くのは得意でなくとも、  
発表は中国語で出来る場合が多く、それが台湾（恐らく中  
国でもそうであろう）の主催者側の運営上の負担を軽減す  
る。

追記：本稿は二〇〇五年三月二十八日に台湾大学哲学系  
大学院学生会および簡帛資料文哲研読会主催で台湾  
大学哲学系において開催された「出土資料と先秦思  
想研究：青年学者国際研討会」の基調報告のために  
執筆された「中国思想研究の国際化における青年学  
者交流の意義：『出土資料と先秦思想研究：青年国際  
研討会』開催に寄せて」の原稿をもとに、その後半  
年間における各種状況の発展も踏まえ、修正ならび  
に加筆を行ったものである。修正にあたっては、台  
湾国家科学委員会人文科学研究センターポストドク研  
究員・野川博之氏の懇切なアドバイスを受けた。こ



のシンポジウムの総企画人として、このシンポジウムを成功させるために尽力してくれたすべての方に心よりお礼申し上げます。

追記二：本稿を脱稿した後、京都大学の金文京教授が、「学会、学界と個人研究」〔『日本中国学会便り』(二〇〇五年第一号、筆者は学会のホームページで閲覧)という一文を發表され、最近日本漢学がおかれている国際的な状況について、筆者と極めて似た意識を披露されていた事実を知った。関心のある方の一読を勧めたい。 (二〇〇五年一月一日記)